

らへたりとて○清少納いみじうまめだちてうらみ給ふ

〔平治物語〕信西子息闕官事附除目事并惡源太上洛事

大宮太政大臣伊通公其比ハ左大將ニテ御座ケルガ、才學優長ニシテ、御前ニテモ、常ニ笑シキ事ヲ被申ケレバ、君モ臣モ大ニワラハセ給ヒ、御遊モ興ヲ催ケリ、内裏ニコソ、武士共仕出シタル事モナケレドモ、思ノ如ク官加階ヲナル人ヲ多ク殺シタル計ニテ、官位ヲナランニハ、三條殿ノ井コソ多ク人ヲ殺シタル、ナド其井ニハ官ヲナサレヌゾト笑ハレケル。

〔古今著聞集<sup>十六</sup>興言利口〕此女院の女房共の中に、いとおかしき事おほく侍けり、醫師時成がむすめ備後とて候ける、佛師雲慶がむすめ越前とて候けるに、ある日越前が額に瘡の出たりけるを、びんごにむかつて、やおつぼね、此かさ見てたび候へ、さすが御身ぞ見しらせ給はんといひたりけるを、びんごとりもあへず、見るまゝに、みせんをいれたまへるをば、なにとかはし侍べきと答へたりけるこゝろのはやさ<sup>○さ原脱</sup>、おかしかりけり、たがひにかくざれあふ事をのみしける。<sup>○中略</sup>尾張が咳病をしてわづらひけるを、備後とぶらふとて、何をやみ給ふぞといひたりける返事に、餓鬼病をやみ候ぞとこたへたりければ、備後さらばひんさうしを煎じてめせといひたりけり、すべてかやうのことばたがひのつねの事也。

〔吾妻鏡十二〕建久二年六月九日丙戌、大理姫君可嫁<sup>良經</sup>左大將<sup>良經</sup>給<sup>給</sup>其儀已在近々云云、仍姫君御裝束<sup>御臺所</sup>御沙汰<sup>御沙汰</sup>女房五人侍五人裝束并長絹百疋<sup>幕下</sup>可被<sup>被</sup>沙汰送之由兼日有其定<sup>被</sup>宛<sup>御家人等</sup><sup>○中略</sup>絹者所被<sup>被</sup>宛<sup>被</sup>善信、義澄、盛長、知家、遠元、遠平已下也、而五輩分致<sup>被</sup>沙汰<sup>所</sup>殘分參期遲々御氣色不快、召奉行人俊兼盛時等於御前被<sup>被</sup>仰<sup>其由</sup>諸人恐怖之處、善信申秀句云先立參著絹者付早馬早參未到絹者練參之間遲引歟云云于時御入興、彼輩事無沙汰而止之此間面々絹進云云、

〔沙石集三上〕癲狂人之利口事